

令和5年度 全国学力・学習状況調査結果の概要

伊那市教育委員会

1 調査の目的（文部科学省）

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 令和5年度調査実施日 4月18日（火）

* 英語「話すこと」に関する調査は4月18日（火）～5月26日（金）の間で実施

3 調査対象 小学校第6学年、中学校第3学年

4 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・ 小学校：国語 算数
- ・ 中学校：国語 数学 英語

(2) 質問紙調査

- ・ 児童生徒に対する質問紙調査
- ・ 学校に対する質問紙調査

5 結果の概要と改善のポイント

(1) 小学校

① 国語

昨年度と比較し、ほぼ全ての領域で向上が見られる。特に「言葉の特徴や使い方」が高い力を発揮しており、日々授業での丁寧な指導と共に AI ドリル活用の成果とも言える。課題は「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域である。国語の授業で学習したことが日常生活での課題解決に生かすことができると感じられる授業作りを大切にしたい。問題形式では、「選択式」の問題は全国と差がないのに対し、「記述式」の問題は全国をやや下回っている。授業の中で、定型に則って書く経験、文字数や引用など条件を付けて書く経験を増やしたい。日常生活の中では、さらなる読書指導の充実を目指し、教師も子どもたちと一緒に読み浸る時間、本のある環境作り、ブックトーク、ビブリオバトルなど、わくわくする読書活動も取り入れたい。

② 算数

領域の正答率は、「変化と関係」が4領域の中で最も高く、「図形」が最も低い結果であった。その理由としては、図形の基本的性質を使って解決する応用的な問題を解く力が十分に身につけていないことが考えられる。紙を折ったり切ったりする等の体験的な活動の中で、見方を変える場面や複雑な状況をつくり、深く追究することが必要である。一方、「変化と関係」では、昨年度の結果と比較しても向上が見られる。今後も、図や式等を関連づけて数量の関係を考察する活動を大事にしたい。また、問題形式別では「記述式」問題に課題がある。答えに至る求め方、判断の根拠、類似点・相違点等気づいたことを記述する活動を重視すると同時に、記述活動の前後で、友だちとの対話を取り入れ、考えを言葉に置き換える力を高めたい。

(2) 中学校

① 国語

問題形式では「記述式」の回答率が高い傾向にあり、与えられた条件の中で自分の考えを記述する意欲は高く、無回答率も低い傾向となっている。一方で、長文を読んで内容を整理したり、得られた情報を活用して設問の意図に応じた回答を導き出したりする力に課題が見られる。また、基礎的な知識を問われる短答式の問題において無回答率が高くなる傾向が見られる。基礎的な内容の定着を十分はかりつつ、日常の授業の中で対話的な活動

を充実させることで、他者の意見を受け入れ、自分の考えと比較しながら意見交換することを通して、課題を解決していく思考・判断・表現の力を伸ばしていく学習を大切にしていきたい。

② 数学

領域では、「データの活用」がやや高い正答率であり、「図形」ではやや正答率が低いものの定着が進んでいる傾向がみられる。しかし、「数と式」、「関数」では課題がみられる。「データの活用」や「図形」では、体験的な活動や具体物の操作などを通して思考したり、説明文を書くことや話し合いの機会が多く取り入れられたりすることで、基本的な用語の理解や数学的な見方・考え方が定着しつつあると考えられる。一方、「数と式」、「関数」の正答率が低い問題を分析すると、用語の意味が十分に理解されていなかったり、数学的な事柄が成り立つ理由や結論が成り立つための前提条件を見いだして説明する力が伸びていなかったりする傾向が見られる。1年次から3年次までの単元を系統立てて学習内容の振り返りをしたり、条件替えや前提条件を確認する必要がある場面を取り入れられたりする学習を大事にしていきたい。

③ 英語

領域別では、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」については、前回調査（H31）と比較すると、生徒が徐々に力を付けていることがうかがえる。各校で学習指導要領に即した授業改善やテスト改善が進んでいることが考えられる。一方で、「聞くこと」「読むこと」の「知識・技能」を問う問題で正答率の低さがみられた。教科書の新出表現を扱う際に、単なる文法事項として扱うのではなく、その表現がどのような場面で使用されるのかを理解し、実際に使う場面を設けたり、生徒がそれらの表現を正しく身に付けているかを見とどけたりすることが必要と考える。また、「書くこと」の記述式、「話すこと」の口述式問題で無解答が多く見られた。英語を正しく話したり書いたりすることに自信がもてない生徒が多いと考えられる。授業では、話したり書いたりする活動において、正確さに着目させる指導だけではなく、多少の誤りがあっても目的に応じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿を認める指導の両面を大切にしていきたい。

6 児童生徒質問紙調査から

生活面において、「朝食を毎日食べる」「毎日同じくらいの時刻に寝る、起きる」等、概ね規則正しい生活が送れている。また、本年度新設の質問項目「普段の生活の中で幸せな気持ちよくなることがある」について、多くの児童生徒が幸せな気持ちを感じている。今後も1人でも多くの児童生徒が基本的な生活習慣を身につけ、幸せな気持ちで生活できるよう、家庭と連携していきたい。また、全国より大変高い割合で地域の行事へ参加している。その中で、地域の大人から褒められたり認められたり頼られたりすることにより、自己肯定感や自己有用感の高まりも期待できると思われる。地域との良好な関わりは、本市・本県の特長の一つでもあり、今後も大切にしていきたい。学習面において、PC・タブレット等のICT機器を使用しての授業は、全ての学校で行っていたり、PC・タブレット等のICT機器の使用について、多くの児童生徒がその有効性を感じながら学習を進めたりすることができている。また、授業において学んだことを生かしながら自分の考えをまとめたりする活動が行えている。家庭学習時間（学習塾や家庭教師、インターネットの活用を含む）について、平日は、児童生徒共に全国より短めの傾向にある（休日は、中学生は全国より長めの傾向にある）。学習時間の長さのみに目を向けるのではなく、その方法や中身の充実も合わせて考えていきたい。

7 今後の取組

各校においては、調査結果の分析に基づいた学力向上及び授業改善の方向を明確にし、具体的な実践を進める。課題のある学習内容については丁寧に学び直しを行うと共に、個別指導等の取組を行う。ICT機器の利活用についてさらに研究・実践を進め、個別最適な学びと協働的な学びの両面からの利活用を目指し、引き続き具体的な取組を行っていきたい。学力向上検討委員会から発信されている授業改善リーフレット（伊那市の子どもに「確かな学力」をつける授業づくりを充実させましょう）等を基にして、「主体的・対話的で深い学び」の具現に向け、引き続き市内全小中学校で取り組んでいきたい。